

# センター・オブ・ジ・アース

2008(平成20)年9月1日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督=エリック・ブレヴィグ/出演=ブレンダン・フレイザー/ジョシュ・ハッチャーソン  
/アナタ・ブリエム (ギャガ・コミュニケーションズ配給/2008年アメリカ映画/92分)

……『海底二万里』と並ぶジュール・ヴェルヌの原作『地底旅行』を知っている？ 地底160キロメートルの世界をフルデジタル3Dの映像で観れば、その驚きと感動は……？ ストーリー性はともかく、美しい色彩とスピード感いっぱいのスリルを3Dで楽しむには、こんな素材はピッタリ。私の試写は2Dだったから、3Dで観たあなたはその感動を伝える責任が……。

## 小学生の頃に読んだ？

私が小学生時代に貪るように読んだ、『十五少年漂流記』『海底二万里』『八十日間世界一周』などは、19世紀のフランスの作家ジュール・ヴェルヌが書いたもの。これらの作品の強烈な印象は今でもよく覚えているが、彼が1864年に書いたという『地底旅行』はあまり明確に覚えていない。それは多分、冒険小説とはいえ、地底についてそれなりの科学的な説明がされている部分が難しくよくわからなかったため……？ つまり、その頃から私は理科系人間ではなく、文科系人間だった。

しかし、活字離れと読書離れが進んでいる昨今、子供の頃にこれらジュール・ヴェルヌの冒険小説を読んだことのある人は一体どれくらいいるの……？

## やっぱり3Dで観たかった！

この映画の売りは「全編フルデジタル3D」。つまり、難しいことはさておき、3Dメガネをかけて観れば立体映像で観ることができるということだ。プレスシートにある、立体映像研究家大口孝之氏の『遂にここまで来た！ 立体映画は新しいステージへ。』によると、2009～10年にかけて80本以上ものフルデジタル3D映画が進行中

であり、『センター・オブ・ジ・アース』はその先駆けとのこと。私は何度か（何分間か）フルデジタル3D映像を体験したことがあるが、それはすばらしいもの。したがって、今日の試写室でもできればフルデジタル3Dで観たかったが、それができず残念。もっとも、刺激的だということはイコール疲れるということだから、92分間にわたって立体映像を観続けたら、その疲れは？ もちろん、フルデジタル3D映像にふさわしいものとしてジュール・ヴェルヌの原作『地底旅行』を選定したのは大正解。なぜなら、この映画に関しては、ストーリーがどうのこうのという以前に、フルデジタル3D映像をどう楽しむかが最大のテーマなのだから。とにかく、理屈抜きでフルデジタル3D映像を楽しまなければ損！

### 導入部はちょっとまどろっこしい……？

この映画のテーマは原作のタイトルどおり「地底旅行」だが、いきなりそこから物語をスタートさせるわけにもいかず、一定の導入部が必要。しかし、観客はあらかじめテーマを知り、フルデジタル3Dを期待して映画を観に来るわけだから、導入部は短ければ短いほどベター。私はそう思うのだが、エリック・ブレヴィグ監督は意外にそこを丁寧に扱っている。

「地底旅行」に旅立つのは、大学教授で地質構造学の科学者であるトレバー・アンダーソン（ブレンダン・フレイザー）と、その甥である13歳のショーン・アンダーソン（ジョシュ・ハッチャーソン）。そして山岳ガイドの美女ハンナ・アスゲリソン（アニタ・ブリエム）の3人。ショーンはトレバーが尊敬する亡き兄マックスの息子だが、所詮今ドキの男の子だからトレバーの研究にはほとんど関心がなさそう。そう思っていると意外とそうでもなく、自分の主体的意思によりアイスランドへの調査旅行へ同行することに。美人のハンナとどんな風にして知り合い、また3人はどんな風に地底160キロメートルにある広大な洞穴に落ちていくのだろうか？ そんな、ちょっとまどろっこしい導入部にまずは注目！

### 陸には光る鳥や巨大きのこが！

ジュール・ヴェルヌの原作はすべてある程度の科学的仮説にもとづいた空想の世界だから、基本的に何でもあり！ まず3人が、はるか160キロメートルも落下した洞穴で発見したのは美しく光る鳥の群れ。そして、巨大きのこたち。まずは、立体映像

よりもこんな色彩感いっぱいの地底の風景から馴れていなくなっちゃ。

そんな手探り状態の探検の中で発見したのが、マックスが生活の拠点としていたところ。そこにはマックスの手帳が残されており、手帳の中には愛する息子ショーンの誕生日を祝う言葉までも。マックス学説の正しさとその偉大さをここで確認できたわけだが、3人が生きて地表に戻らなければ第2のマックスになってしまうだけ。3人の方ではマグマの沸騰が始まっていたから、地震の発生は時間の問題。さてその間に、3人はどんな手段で地底から地表へ脱出するの……？

## 海には人喰い魚やネス湖のネッシー（？）が

この映画の上映時間は92分だが、ほぼ半分を過ぎた頃から俄然アドベンチャー色が強くなってくる。地表へ脱出するためには熱くなる水蒸気の利用が不可欠。マックスが残したいくつかの資料からそう推論したトレバーの発案により、3人が力を合わせてつくったのが上空を走る熱風を利用した帆かけ船。

この「帆かけ船」は、海の上を快調に走り始めたが、海には人喰い魚やネス湖のネッシー（？）がいっぱい。さらに、とりあえずのやつつけ仕事で動いているだけの3人だから、万事そうそう計算どおりうまく運ばないのは仕方なし。海上で嵐と格闘する中、ショーンは熱風にあおられてマストを折ってしまった帆と共にはるか上空へ飛んでいってしまったから大変。帆を失い、いかだ状態となってしまった帆かけ船に残ったトレバーとハンナの2人と、帆に乗って上空へ飛んでいってしまったショーンは、この先いつ、どこで再会できるのだろうか……？

## 陸には恐竜が！ 磁場には不思議な岩石が！

前半にタツプリとつめこんだ人情論を尻目に、後半は冒険活劇にふさわしいスリルとアドベンチャーが次々と。ショーンを探し回るトレバーとハンナを襲う食虫植物はトレバーの腕力でノックアウトできるレベルだったから、まだかわいいもの。しかし、ある不気味な地帯に入り込んだショーンを突然襲った巨大な恐竜ギガントサウルスはヤバい。とりあえず洞穴の中に飛び込んだショーンは危機一髪恐竜に食われるのを免れたが、洞穴を崩されるのは時間の問題。さて、ショーンはどうやってそこから脱出を……？

さらに、私にはよくわからないが、強力な磁場が実現すれば岩石だって浮かんでく



© MMVIII NEW LINE PRODUCTIONS, INC. AND WALDEN MEDIA, LLC. ALL RIGHTS RESERVED.

るらしい。私が去る8月24日に上海で乗ったりニアモーターカーは、まさにこの磁場の原理を活用したもの……？ こんなスピード感のある3人のアドベンチャーぶりをフルデジタル3Dで観たら、さぞ楽しいことだろう。

## 地底からの脱出は意外とシンプル

3人の主人公たちが地底160キロメートルの洞窟に落ちたところから、興味的是なのはあの3人がどうやって地表に戻ってくるの、ということ。そしてそこにはそれなりの科学的根拠が必要。したがって、恐竜から逃れた後、磁場の中を岩石伝いに脱出し、やっと到着した川で優秀なガイド、ハンナが用意した船(?)に合流することができた御一行は、地表への脱出に向けて最後のチャンスに賭けることに。さてその手段は……？

その科学的根拠について私には全然コメント能力がないが、○○、△△という理屈

に従って脱出してくるのだから、地底から地表への脱出はメチャ早いはず。それは、地底へ落下していくのがメチャ早かったのと全く同じ。したがって、地底からの脱出は時間的にはあっという間で、意外にシンプル。なるほど、こんなもの……？

## しっかり、おみやげも……

トレバー、ショーン、ハンナの3人が地表から「噴出」し、さらに「落下」して、やっと停止したのは、ある国のある人家の中。おかげで彼の家はメチャメチャに壊されたからえらい迷惑。しかし御一行はしっかりと最初に落下した地底で今後の研究のためにあるおみやげをリュックの中に入れていたから、これが大いに役立つことに。さてそのおみやげとは……？

このおみやげは、家を壊された彼をして、またいくらでも壊してくれと納得させたほどだから、かなり強力。10年前に行方不明となった兄マックスの遺志を継いでトレバーが続けていた地球内部のマントルを貫く裂け目の存在を証明する研究は、競争原理を無視することができなくなる中で閉鎖寸前とみられていた。しかしトレバーの研究はこのおみやげのおかげで息を吹き返したばかりか、ビル1棟を研究室にすると決定するほどに。この映画は、いかにもハリウッド映画らしく、トレバーもショーンもそして女性のハンナまでも西部開拓史を彷彿させるアメリカ人のフロンティア精神と陽気なヤンキー魂を見せてくれるが、同時にしっかりとおみやげを持って帰ってくる場所は立派。

こんな「結果オーライ」の冒険旅行に成功すれば、トレバーもショーンも第2、第3の冒険旅行を望むのは当然。さて、次の目的地の指針となる本は……？

2008(平成20)年9月2日記